

言葉の語源を発見する楽しみ

木村 牧人

一 「陛下」の語源を考える

太陽は東から昇り、西に沈む、そう私はずうっと思っていた。

ある日、「太陽は昇りはしないし、沈むこともない。」ということに気づいた。

「太陽が昇る」ことを日常感覚的にそう見るのは、地球の自転のせいだ。

しかし、天文学的には太陽は昇りもしないし、沈みもしない。

太陽が東から昇り、西に沈むという感覚は、天動説の考え方だ。

地球が太陽の周りを回り、地球の自転によって、太陽が東から昇り、西に沈むように見えることは、小学生のころから知っていたはずなのに、日々の日常生活の中で違って感じる、そういうことは身の回りには多い。最近になって、私はカントの「純粋理性批判」をわかりやすく解説した本を読み、哲学を学ぶことのおもしろさと、「不思議を発見することの大切さと楽しみ」を知った。

以来、私は発見することの大切さと楽しみを知ることになった。世の中に不思議なことはたくさんある。その一つひとつをノートに書き留めるようになっていた。

私の心の中で不思議に思い、長い間心の中に閉じ込めている思いがひとつある。今から六年ほど前であるが、かつて「週刊朝日」に連載された丸谷才一氏の「日本語相談」より抜粋して単行本（朝日文芸文庫）としてまとめた本の中の「小渕長官の敬語はなぜヘンか？」というタイトルのついた短い一文が目にとまった。

その内容は、昭和天皇が崩御されたおり、藤森宮内庁長官がご危篤の発表をした際の記者会見の内容について記したもので「天皇陛下には本日午前四時半すぎに」とご危篤の発表をし、ついで小渕官房長が「竹下総理には吹上御所に向かわれ・・・」とあるのは、「なぜかヘン」と考えた「週刊朝日」の読者の疑問に対し、丸谷才一

氏が回答した内容について記したものだ。

大正十五年十二月二十五日に大正天皇が崩御された際の「天皇陛下には今二十五日葉山御用邸において崩御あらせられる」との記事も引用されている。

読者の疑問として、「天皇陛下には」の用語は良いが、「竹下首相には」というのは「どこかヘン」というものだ。漢和辞典には、陛下の陛とは階段に上る階段のことと記されている。つまり、「陛下」の意味は、宮殿に登る階段の下ということなる。「陛下には」の「には」は、格助詞の「に」に係助詞の「は」がついたもの。場所、時間、対象など格助詞「に」の意味を強調したものと辞典には書いてある。丸谷才一氏は、天皇陛下が「場所あつかひされてゐることが急所です。場所扱いだから二ハになる」「ところが、小渕官房長官は、『竹下総理』は場所あつかひではないし、場所あつかひするほどの尊貴な人物ではないし、場所あつかひしてはをかしい、という感覚が身につけていなかった、つい言ひ間違へてたのかもしれないけれど」（丸谷才一の日本語相談「朝日人文庫・一二八頁）と書いている。この一文を読んで、私は、「天皇陛下には」と「竹下総理には」という二つの言葉は厳密には違うのだということに気づかされた。丸谷才一氏は、「語感の鋭い人の質問だなあと、思つて、非常に感心しました」（前記書・一三二頁）と結んでいる。「崩御」という言葉は、天皇陛下にしか用いられない言葉だ。「朕（ちん）」などもそうだ。天皇陛下だからこそ、使用される言葉ともいえる。

日本語の言葉の意味を厳密に解釈するという意味では、良い一文だと思う。でも、私は、この一文に共感する同時にどこか「ヘンだなあ」という納得しがたい思いがあった。

「天皇陛下には」という「には」が天皇陛下ほどの高貴なお方に用いられる言葉で、「竹下総理には」という用いられ方がおかしいということになると、「私には」という言葉の用いられ方はどうなのだろうかという疑問がわいたからだ。

丸谷才一氏の考えを延長すると「私にはわかりません」という言葉の用い方も「ヘン」ということになる。大正天皇の崩御の際の記事も引用されていたので、宮中では歴代こうした言葉の用いられ方をしていたのであって、「私には」という言葉の用いられ方は最近になってのことなのかなと思っていた。

「小渕長官の敬語はなぜヘンか？」という記事がこの六年の間ずっと私の頭の中から離れなかった。

哲学の本を読み始めて、私は発見することの大切さと楽しみにより一層こだわるようになったのかもしれない。時代が変われば伝統や風習は変化する。言葉だって変化するのあたりまえだ。

最近になり、古事記、日本書紀と並行して、古典を読んでいるとき、「宇津保物語」の中に「大将殿には平らかにおはしましき」という一文が私の目にとまった。この一文は、「小渕長官の敬語はなぜヘンか?」という疑問について六年もの長い間抱いていた疑問が解けた瞬間だった。

「天皇陛下」以外にも古い時代に「には」という文字が用いられていたのだ。宇津保物語の中の「大将殿」がよければ、「竹下総理」も昔の時代でいえば、大将のような存在であるわけだから、「竹下総理には」という言葉の用い方でも良いはずである。

最近の辞書の「には」の使い方としては、「尊敬の対象となる人物を主語として表すことを避け」と書いてある一方で「のちには、人物を示す語を直ちに受けるようになった」とも書いてある。

この「のちには」とはいつの時代のことを指すのだろうか。少なくとも、宇津保物語が成立した以後の時代ということになると、小渕官房長官の発言は必ずしも「ヘンではない」ということになる。

つまり、「小渕長官の敬語はなぜヘンか?」というのは、必ずしもヘンではなく、ヘンとは思えるようで、実際には長い日本の歴史の中で考えてみると、正しい日本語であるということになる。

私の友人に、「小渕長官の敬語はなぜヘンか?」という疑問を解決したことを話した。

「いつから調べているの?」

「足掛け六年くらい」

「ひまだねえ。」と呆れられた。

私にとっては、丸谷才一氏も気づかなかったことを見つけたつもりだったので、私の友人にとってはどうでもいいことだったのだ。ただ、私の心の中で疑問をそのままにするのではなく、眠らせ熟成、発酵させて、いつの日かおいしいものに作り上げるような感覚を持ちたいと思った。

二 「英霊の語源の発見」

今年九十歳になる私の祖母の八人兄弟姉妹のうち、女四人姉妹以外、四人の兄弟は全部戦死した。祖母の夫の弟（義理の弟）と夫の父（義理の父）も戦死している。

このため、六つの位牌と六つの霊璽、そして靖国神社に六人が霊璽簿に登載され英霊として祀られている。位牌は仏となったしるし、霊璽は神となったしるし、靖国神社の霊璽簿にも神霊となったしるしとして祀られている。すると、仏の御霊と神の御霊と英霊はどこで融合するのだろうか。

そもそも、墓石と位牌と霊璽と霊璽簿に登載され英霊を祖母はどう受け止めているのだろうか。

墓石は近所にあり、位牌は仏壇にあり、霊璽は神棚の祖霊舎の中に金糸銀糸であつらえた錦（にしき）の袋に包まれている。英霊だけは、直接靖国神社に行かなければ会うことはかなわない。九十歳になる祖母は、「英霊って、神さまになったということだよね」とつぶやいた。

祖母は、戦後、なんども靖国神社に参拝している。

英霊についてその意味を検索すると幕末の藤田東湖の漢詩「文天祥の正気の歌に和す」の「英霊いまだかつて泯（ほろ）びず、とこしえに天地の間にあり」の句が志士に愛唱されていたことに由来していることがわかる。

文天祥（一二三六年～一二八二）は、中国南宋の忠臣。

文天祥の「正気の歌」に和して、藤田東湖が「英霊いまだかつて泯（ほろ）びず、とこしえに天地の間にあり」の漢詩を作り、それが幕末の志士の共感を呼び、日露戦争（一九〇四～〇五年）後に新たに「英霊」と称されるようになったと「英霊」の語源が記されている。（出典・「靖国史観」（小島毅・著）

文天祥の「正気の歌」の中には、英霊という言葉がないので、文字通り、文天祥の「正気の歌」を手本にして藤田東湖が「英霊」の漢詩を作ったということなのであろう。

藤田東湖が「英霊」の文字をどこに依拠したのだろうか。

そこで、古事記や日本書記を調べたがどこにも出てこない。

中国のサイトで漢文を検索してみた。

「三国志演義」の中に出ていた。

第五十一回到「忠義之心、英靈之氣」（忠義の心は、英靈の氣）

そして、第九十一回において、

諸葛亮が崇りを鎮めるために、祭祀を行う場面の中で

「列燈四十九盞、揚旛招魂」（四十九の燭台を立て招魂の旗を掲げ）

「汝等英靈尚在」（汝らに英靈があれば聞かれよ）

と記されている。

ほかに、中国・北朝から隋代の官僚で歴史家と知られ、北周の武帝に仕えた李徳林（りとくりん・五三二年～五九一）が現したとされる「隋書」の中に「目送之曰、此河朔之英靈」の文字が見える。

こちらの方は、「李徳林傳」として「字源」（角川書店）（一六二五頁）に出典が明記されている。

したがって、藤田東湖は、中国の古典から「英靈」を引用したことがわかる。

靖国神社の英靈は、「天皇の為に戦って戦死した戦没者が靖国神社に神霊として祀られる」というのが一般的な解釈だ。英霊は、神霊と同じと祖母は理解している。

日本固有の文化の一つとして「死者の御霊」を大切にするのであれば、その御霊の言葉は、「やまとことば」である必要があると思う。もし、「英霊」という文字が、中国古代の歴史において、中国武人などを指していた場合、一体どうなるのだろうか。中国古代において用いられた「英霊」という文字を検証するには、中国の漢文を横断検索し、さらに時間を要して調べる必要がある。

「陛下には」の語源の発見と同じように、私なりの方法でその語源の発見につとめたいと思う。